

の子、即ち唐書に磨延啜と曰ふものに就き、同行27以下は其の子牟羽可汗に就きて記せり、XI 2は宰相頓莫賀、即ち合骨咄祿毘伽可汗として七八〇年に位に上りしものを指し、同行16より其の子泮官特勤多邏斯に就き、最後に52よりは幼年の阿睺を省略して七九五年——八〇五年在位の合骨咄祿毗伽可汗に就きて記せり、而して碑文の残りの全部は此の骨咄祿可汗の事績を記し、常に之を天可汗と稱せり、されば此の碑は骨咄祿の治世の後半八〇〇—八〇五年の間に建てられたるものなる事を認めざる可らずとするなり。^{〔一四〕} 碑のVI 27以下Xの終に至る迄の可汗の事績、即ち、

「愛登里囉汨沒蜜施頡咄登蜜施合俱錄毗伽可汗」の事績は、唐を助けて京洛を復し、唐と兄弟の國となるに至れりと記さるゝが如きに鑑むれば、容易に之が唐書に記せる牟羽可汗、而して舊唐書及び冊府元龜封冊篇に登里頡咄登密施舍（冊府元龜に據る、舊唐書は合に作れり、共に合の誤なり）俱錄英義建功毗伽可汗〔一五〕と記せるものゝ事績と一致するものなることを首肯する

に足るべく、碑・史兩者は茲に一致點を見出せるものなれば、之を基點として兩者に記せる可汗の名に就きて比定を求むるに、XI 2—5の可汗襲位は、氏の見たるが如く頓莫賀達干の襲位に當り、同行16—27の登里囉沒蜜施俱錄毗伽可汗は泮官特勤多邏斯に相當し、其の徽號も冊府元龜封冊篇に載する多邏斯の徽號〔一六〕と全く相合す、同行38—44の「子 汨咄祿毗伽」は、氏の省略して記さずと曰へる幼少なる阿睺に當り、而して同行56—73の登里囉羽錄沒蜜施合汨咄祿胡祿毗伽可汗は又氏の説けるが如く骨咄祿即ち懷信可汗に相當し、其の徽號も新舊唐書に見ゆるものと相合す、只兩唐書には汨咄祿の三字を脱すれども、冊府元龜封冊篇には此の語も見え、騰里囉羽錄沒蜜施合胡祿骨咄祿〔一七〕毗伽懷信可汗と記せり、之を碑文に見ゆるものと比すれば胡祿と骨咄祿との兩語が前後せる相違あれど、思ふに之は冊府元龜の誤に外ならず、要するに碑文に見ゆる此の可汗は唐書に記さるゝ懷信可汗に當るものなること疑